



Publishing house: 2-19-32Moriyama Kanazawa
JodoShinsyu Jhokoji Phone&Fax076-252-4922
www.jhokoji.net/ info@jhokoji.net 2018.07.01

自身を明らかにする

円覚寺住職 菅原 貴之

皆様、こんにちは。先程ご紹介いただきました、滋賀県竜王町という所から参りました円覚寺の菅原と申します。本日はこちらの浄光寺様の「追甲会」にご一緒させていただくご縁を頂戴いたしましたこと心より感謝申し上げます。ごさいます。本日は至りませんけれど、何卒よろしくお願い申し上げます。滋賀県の竜王町、ご存知の方おられますか？アウトレットなどご存知ですかね。石川県からのお客様も高速道路を利用してお越しただくようなことで、当初建てられた

ということでございます。そのアウトレットの程近くにございます。歩いて十分、十五分くらいの所。アウトレットに行かれた方はご存知かと思えますが、こちらの金沢市の街並みとは全く違い、何もない所でございます。こちらの御住職とは学生時代から友人としてお付き合いをさせていた দিয়ে おりました。昨日、久しぶりに夜お会いしましてですね、僕はちょっと変わってしまつたのですね。しかしこちらの御住職は変わらず、体系もスリムに保っていらつ

しやるということ、あの頃のままだなという風に感心しておた事でございます。

佛光寺派

もう一つご紹介いただきました中で、佛光寺派という宗派が出て参りました。浄光寺様は何派か、皆さんご存知ですよ？はい、大谷派。先程ご紹介いただきましたのが、佛光寺派という宗派でございます。この佛光寺派という宗派はどういう宗派であるのか、滋賀県でもよく聞かれるんですね。「佛光寺派さんはお西さんなんですか？」

違ふのか、というところでございませぬけれど、大谷派さんと本願寺派さんのご門主様は親鸞聖人の血を継いでいらつしやる方でございます。御子孫ですね。親鸞聖人の御子孫がご門主を務められていらつしやる。佛光寺派や他もそうなのですけれど、こちらの方はどういふ風にできたのかと申しますと、親鸞聖人のお弟子さんが開かれた宗派と言う風に言われております。

「お東さんなんですか？」と。そのお東さんの中に佛光寺派があるとか、お西さんの中に佛光寺派があるとか、そんな風なご認識の方がたいへん多いのかな。真宗の十派、ご存知の方おられるかと思えます。大谷派さん、本願寺派さん、佛光寺派、あと七つの宗派がございませぬ。あと七つの宗派がございませぬ。これが一応横並びに真宗十派と言う風に言われている。その中の一つが佛光寺派でございます。何がどう

最近研究が進んできたそうでございます。親鸞聖人が関東に行かれた時代、教えを聞く集団ができた。ご門徒さんの集団ができたということなすね。その集団がどんどん、どんどん大きくなってまいりまして、教団になつていった。ですから、そのご門徒さんの集団が親鸞聖人のお弟子さんをお願いしてご門主として就いていただいたという風な流れであると聞いております。大谷派さん、本願寺派さんは血脈とも申します。お弟子さんがひらいた宗派の流れを法脈という風に言われているそうでございます。お弟子さんが開かれた宗派の佛光

寺派に属する円覚寺というお寺でございます。教えと致しましては親鸞聖人の教えを受け継ぐ、引き継ぐという意味ではすべて同じ意味でございます。同じスタンス、目的を持っているのではないかなと思っております。本日は一時間という事でお聞きしております。では早速本題の方に入らせていただきたいと思います。そのような事でございます。

追弔とつうじと

本日、追弔会の法要という事でございます。「追弔」文字をみますと、追つて弔うという風な文字を書きます。この弔うという言葉でございます。すけど、どのような事なんだろう。亡くなった方を偲ぶ、これは非常に大事な事でございます。しかし、命が終わったから、私たちの人生が終わりののかと申しますと、そうではない。お話ししているとよく言われるのですね、「死んだら終わりやな」と。でもそれ寂しくないですかね。もし、交通事故でもそうです、病気でもそうです、急に命が終わってしまったら、終わりやなと、そんなこ

と考えると生きていくのつてちょっと寂しくないでしょうか。それならば、何故弔うのか、何故追弔会を行うのでしょうか。

私たちの命が終わる、これ大変な人生の一大事業でございます。生まれる事と同じ位の一大事業。生まれることもやはり大きい事、命を終える事も大きい事。先程申し上げました「死んだら終わり」というところで私たちの人生が終わってしまう。これ、身体という所から見るとそうなんです。仏教においても死というのはどういう事か、身体の機能が全て止まってしまふ事が死である、と言われております。そこから考えますと心臓が止まる、脳の働きが止まる、このことで私たちの命が終わる。そこで人生が終わりののかな、と考えると終わりという側面があるかもしれない。けれども、私たちがこうして追弔会をお勤めする、この意味でございますけど、やはり命を受け継いでいくということをおの意図でございますけど、やはり命のような形で表しているのではないのか。本当に死んだら終わりやな、という世界でしたら、恐らく私たちの

心の中で亡き人を偲ぶという事はないのではないか。終わっているんですから。しかしながらそれで済まないので私たちが人生でございます。やはり良くしていただいた親様、お父様、お母様、またおじい様、おばあ様、在りし日の姿を想い、ああこんな人だったね、こんなこと言ってたね、そのように偲び、亡き人を偲んでいく、そこに次の世代に命を受け継ぐ、引き継ぐ、そのような大事な意味があるのではないか。

そうしますと、私たちの人生、命終わったら終りののかと改めて考えてみますと、終わりではないのですね。亡くなられた方、命終えられた方も私たちの胸の中で確実に生きておられる。まあ生きておられると断言してしまうとどうなのという意見もあるかと思うのですけど。しかし、私たちの胸の中には大切な方、大好きだった方、亡くなられても胸の中におられる訳でございます。そう考えますと、命が終わる、死を迎えても、私たちの人生はそう簡単には終わらないんじゃないか。命がこうして受け継がれていくその中に私

たちの命が帰っていく。そこに私たちの人生が本当の続いていくのか、終わってしまうのかという所が見えてくるのではないか、そう思うような事でございます。本日、追弔会という事でございますけど、追弔会の意味という事を一つおさえさせていただきますました。

ただ念仏

本日はもう一つ皆様と考えさせていただきます。親鸞聖人のお言葉から私たちの生きる意味、そこを考えてみたいと思っております。親鸞聖人のお言葉の中でこの様なお言葉がございます。「ただ念仏して」と。この一文を読み上げさせていただきます。「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」と。『歎異抄』の一文から「ただ念仏して」という言葉を取らせていただきました。

今読み上げさせていただきます。一文でございますが、親鸞聖人が得度をされまして比叡山で修行をな

さつておいでました。比叡山の仏教というのは天台宗、色々な修行が色々なお堂で行われていた。親鸞聖人は年を経られまして比叡山の修行では救われないのじゃないのかな、と思い直されたといわれています。これは修行が悪いのではなく親鸞聖人のご自身の問題として救われないんじゃないかなと思われた。それならば親鸞聖人ご自身が救われる道はないのかという事で出遇われたのが法然上人。知恩院さんの開祖といわれております。浄土宗を開かれておりました法然上人のもとに行かれてお念仏の教えに帰依されたと言う風なことでございます。そのことが「ただ念仏してよきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」と、法然上人に勧めていただいた念仏だけでいいんだと、親鸞聖人は断言されております。これはどういう事なのか。先程、皆様お勤めをされておりましたけれど、始まる時と、終わる時に「ナマンダブ、ナマンダブ」と声にされた。お念仏って何なのでしょうね。ありがたいな、という感じはするのです。身が引き

締まったなという感じはするので、私、正直申しましてお念仏で救われたなあという感じがしたことはございません。なのでこうして皆様の前でお話しをさせていたたく、このご縁を大切にしている様なお話をさせていただきます。皆様とそこについている様な事でございます。この念仏、果たしてどういう事であるのか。たくさん本がございましてですね、解説書がございまして。難しい事があつたりですね、難しい言い回しがあつたりする。そういうものを読んでもおりましたもなかなか「ああよかったな」、「救われたな」とはならない。私の力ではそれは分からない。それならばどういう事であるのか。お念仏と一緒にしましょう、お念仏を共に称えましょうという立場でございまして、やはりこれは明らかにしていく努力をしていかないといけないなど、常々思っております。

おばあちゃんへの手紙

今年の春の事でございました。四



月です。九五歳のご門徒のおばあさんが亡くなられたのです。大変元気なおばあさんでいらつしやいました、亡くなる二週間前にお参りに寄せていただいた一緒に話してたのです。大分背中も曲がってしまつてしんどいなどおつしやっているが、ご飯もよく食べる、自分で身の回りの事もする、お顔ノリも良かったので、ああ良かったな、また来月会いましょうねと言つて帰つたのです。その二週間後、一ヶ月持たず急に亡くなられた。大変びっくりしたのですけど、そのおばあ様のお葬式で

すね、喪主様とお話しをしております。喪主様の娘さんはアメリカにいて急に帰つて来られないからお通夜もお葬式も出られないそうです。おばあさんのお通夜、お葬式になんで出ないんだ、なんとしても帰つてくるのが筋じゃないか、そう思われる方もいらつしやるだろうなと、思いながらですね、ああ、そうですか。それぞれご事情がございまして。また一周忌とか、三回忌にまた帰つて来れる時を見計らつてお参りに来させようと思つた。喪主様がそうおつしやいました。そうかと、それなら来られる日が良いんじゃないかとお話しをしております。したけれど、お葬儀の一番最後、御礼が終わつた後に弔電のご披露があります。打ち合わせではお聞きしてなかつたのですけど、そのお孫さん（喪主の娘）からおばあ様へお手紙が届いていたのです。今、お手紙と言ひましてもファックスなどですぐ届く時代でございます。お参りは出来ないけれど、おばあ様にお手紙という形でお別れをされるのだな、ああ良かったなと思つたのです。

らね。どんな呼びかけなのかと申しますと、阿弥陀仏に南無せよ、南無阿弥陀仏とお念仏を称えなさいと言われているから、お念仏を称えている。ところが私たちの姿がそうではないのですね。別のこのためにお念仏を称えているはずなのです。それが多いはずなのです。病気が治りますように、お金がもうかりますように、ずっと若くいられますように、ナマンダブ、ナマンダブ・・・これが私たちのお念仏。そうしますと、「阿弥陀仏に南無しなさい」、この呼びかけには必ずしも応じることが出てこないのではないかと。

おばあちゃんの話に戻しますと、「おばあちゃん」と呼びかけられているのに、「なあに」と答えていないのが私たちなのです。「阿弥陀仏に南無しなさい」と呼びかけられているのに、その呼びかけに応じられないというのが私たちなんです。ですので南無阿弥陀仏、このお念仏というもの、私たちの目覚めを期待している。どのよう目覚めかと申しますと、自身が明らかとなるということです。

「自身を明らかにする」

私たちは何故苦しいのか、何故悩むのか、この原因を探ってみますと、私、今身長が168センチなのです。背が高くなりたかったのですよ。でも思っても伸びないでしょう。思っても伸びたら良いですよ。180センチになりたいたいと思つてなれたら良いですけど、なれないのが私なのです。それと同じように、私というものを正確に見ることなく、こうだったらいいな、ああだったらいいな、それに引つ張りまわされている。そこに苦しみ、悩みがあるのではないかと。そういう風に言われております。ですから、私たちが見ておるもの、



赤井信子

考えておるものというのは、正確にそのものを指している訳ではない。期待を込めて見ている事ばかりなのではないか。だから腹立つのですよね。

お家でもね、こうしてくれたいのにと、毎日僕言われております。嫁なのですけど、嫁の中にはこういうお父さん像、こういう夫の像があるのですよね。それに合つてこない。「あなたの中に勝手に理想像作ってんじゃないの」そう言う喧嘩になるから言えないのですけど、恐らくそういう事だろうと。黙つていてもゴミ捨てに行つてくれるとかね、黙つていても食器洗つてくれるとかね、そういう像を作つて

ている。それも同じこと。期待しているだけなのです。早く着くことを期待しているだけ。でも早く着かない現実には遭うことで、自分にはなく外に責任を転嫁している。あれが悪いこれが悪い、そればかり言っているのが私たち。そこに悩みというものがあるのではないかと。

ですのでその悩み苦しみというものから抜け出す為には、自身を明らかにしていく。出来なかつたら、ああ出来なかつたな。出来たら、ああ出来良かったな。そういう風に私たちの身の回りで起こることをそのままに受け止めていくことが出来れば、悩みや苦しみというのは無くなるといふ風に考えられております。これ自分自身に対してもそうなんです。背は伸びませんよね。ああこの身長なんだな。この身体で生きていくんだな、よかつたなあと思うのが幸せなのか、まだまだお腹がへこまないからご飯減らさなきゃいけない、と思うのが幸せなのか、自ずと幸せな生き方が見えてくるのではないかと。やはり出来る事は出来なかつた事、出来なかつた事は出来なかつ

ね、そういう像を作つている。期待しているのではないかと。その期待に合わないから、腹が立つ。私もそうです。同じです。車で移動する時に、大体三十分で着くかな、少し早めに出て四十五分前に出たら余裕もつて着けるな。でも物凄い渋滞して、車の中でカンカンに怒つ

た事で、今回ご縁が無かったのかなと受け入れていく。これ自分自身の存在に対してもそうなんじゃないか。

この阿弥陀仏に南無せよというのは、自身を明らかにしていく。私たち自身の在り方、考えもそうでございます。身体もそうでございます。すべてが私という存在の一つの要素。「身体と心が別です」とたまに聞きますけど、そんなことはない。すべて私。その私を明らかにする。だけれど良いことばかりするとか、良いことばかり思いつくのではない。悪いことを考えるのも自分なんです。悪いことを考えるのがダメかと申しますと、またさっきの話に戻るのです。「こんな悪いこと考えちゃダメだ」というところで悩みが発生する訳です。ああ、こんな悪い考えが出てきた、ちょっと置いておこう、これが仏教的な考え方だと言われております。瞑想とかいいますけれど、無になるわけではないそうでございます。人間は無になれないそうでございます。例えば何もせず座っている。座っておりますと、いろん

な思いが浮かんでまいります。良いこと、悪いことかまわず思い浮かんでくる。それが人間だそうです。それに執着してしまうと苦しみ、悩みになっていく。それならばどうするのかと申しますと、どんどん、どんどん、次から次へと思い浮かんでくるその思いの波を上手く乗りこなすサーフィンみたいなものだ、ある先生がおっしゃいました。感情が下してまいります。その中に巻き込まれてしまうのか、波の上に乗ってスイスイと渡っていくのか、どちらが良いのかと考えますと波の上ですよ。それが瞑想という方法で練習されているそうでございます。思いが出たら捨てる。

その思いというものが、私の心の中に果たしていつまで残っているのか考えてみますと、今朝、起きてから何を考えていたのかということをご説明いただける方いらっしゃいますか？今日、朝起きてどんなこと考えられました？もう十二時前になってまいりました。七時に起きてから五時間近く経ちましたが、これ分らないのですよね。なんでかと申し

ますと、それほど沢山の思いが浮かんできているからだそうでございます。そうしますと、私の思いというもの、一瞬、一瞬移り変わっていくもの、止まることがないのですね。止まっていたら、覚えているはずですよ。今日僕一個だけ覚えていました。十一時からこちらで法話するということ。その事ならずと考えると、残るの事なら、残るのですけど、そうでなければ、なかなか残ってこないのが私たちの心の中。心の中だけではなく、私たちの身体の外もそうではないかと。この間まで梅雨でジメジメしていた。今もジメジメしているんですけど、半年前までは「寒い、寒い」と言っていたはずなのです。それがいつの間にか汗ダラダラかいて「暑いな、暑いな」と。「暑いな」が口癖になってまして、涼しい部屋にいても暑いなど言ってしまうほど口癖になっております。私たちの心の中も、私たちの外の環境も、一瞬たりとも止まることなく動いている、そういうものがございます。

阿弥陀様というのは恐らくその流

れではないのかな。誰かがどうにかして暑くしている訳ではないんですよ。誰かがどうにかして雪を降らせている訳ではないんですよ、誰かがどうにかして僕のお腹を膨らませている訳ではないんですよ、ご縁でそのようになってきたのです。自然の仕組みもございますけど、それも恐らくご縁。そのように一瞬たりとも止まる事なく動いていく世界。どんどん動いていくのです。動いていく世界が恐らく阿弥陀様という形で私たちにわかりやすいお姿で現れて下さったのではないかと。ですので、正面に阿弥陀様が安置されておりまして、人間の身体をさされております。これ私たちにわかりやすいように、仮に人間の形をされている。その阿弥陀様のおはたらきで私たちは救われるのです。このおはたらきこそが、止まる事なく動き続けるそのものではないのかな。それを何かきっかけがあったり、何か出来事があったりすると、ご縁だなどという風に、私共言っているのではないのかな。ですので阿弥陀様という存在が、流れ続けている私たちの

感情であったり、私たちの身の回りの世界であったり。それが阿弥陀様であり、阿弥陀様のおはたらきであるならば、「南無せよ」と言われているのは、そのおはたらきの世界に目を向けなさいということ。私たちの身体、心、また外の世界、一瞬たりともそのまま止まる事はないんだ、移り変わっていくんだよ、そこに目を向けなさいというのが、南無阿弥陀仏の、「南無せよ」という言葉ではないのかな。

そういったしましたら、随分楽になるのかなと想像いたしております。なんでこんなに暑いんだろう、しょうがないんです、そういう風になってきたんです。賢く対処していかなければならぬ。なんであんなことしなきゃいけないのか、しょうがないんです。ご縁なんです。ただいていく所に私たちの人生が開かれています。それで少しは私の文句も減っていくのかなという気がいたしておられます。文句というのはいはり自分自身の中で不満を作り出して、それに対して言っている。人に言っているようで自分に言っているよな

ものでございます。不満というのは、期待している姿。それに応じてもらえない、それに沿うてないからこそ不満。しかしながら、一方で阿弥陀様のおはたらきという世界がございます。あるがままに流れていく。あるがままに命を取っていく。あるがままに命を終えていくというその流れに乗ることで、今より少しは安心できるのではないかな。そのためにお念仏を称えましょうという風に言われているのではないかな。そう考えますと、自然な流れに私たち頷いておるのか、先ほどから申し上げています。なんでこんなに暑いのか、なんでこんな寒いのか、なんでこんな悩みがあるんだ、そのように流れに逆らって生きているのが私たちの在り方。ですので、先ほど申し上げました、「おばあちゃん」という呼びかけに対して私たちが、「なあに」と答えられていないというのはそこではないのか。「阿弥陀仏に南無しなさい」、「阿弥陀様に南無しなさい」、「帰命しなさい」、「そのおはたらきの世界に乗りなさい」、「逆らうことなく乗りなさい」。その呼びかけに「はい、

わかりました」と言えていないのが私たちではないのかということが見えてくる訳であります。

視点が移り変わってくるお話でありますので、非常に微妙なお話なのですけど、私たちの内も外も常に流れ続けている。その流れに乗るのが一番。その中にいることが分かるだけでもいいわけです。ああ、こんな中におったのかと、人間一番不安になりますのが、自分の居場所が分からなくなる。どこにいるのかから不安でございませう。そういう風な中で生きておる。私たちの身体もそういう風な中で生きてくれているという風なことが明らかになっていくことで、私たちの人生も変わっていくのではないのかな。その方向に目を向けなさいというのが南無阿弥陀仏というお念仏だといわれている様でございます。

私事ではございますけど、昨年十二月に父を亡くしました。七十二歳、胃がんでございまして、その時に感じたことを少しお話させていただいて終わりにさせていただきます。闘病生活五年くらい。ちょうど今頃でございます、父の胃がんが

父の死

分かって手術をしたのがサルスベリの花が咲いている頃でした。ちょうど浄光寺様の境内にも咲いておりませんが、病院の裏手にもサルスベリがございまして「ああ参ったなあ」と思ってサルスベリを見ていたのを思い出すのです。それから五年ほどで命を終えたわけでございますけれど、驚いたことが二つございます。無くなる2週間前ほどからですかね、お医者さんに今日明日かもしれないと、ずっと言われていました。今、私は親と離れて暮らしておりますので電話がかかってきます。「お父さんがダメかもしれないから帰ってきて」と言われるのです。「ああ分かった」と仕事が終わってから車を飛ばしてその都度帰るのですが、何かこれ、初めてじゃないなという気がしました。初めてなのですよ、親を亡くすのは。母はまだ健在でおります。初めてなんですけど、その向かうということが初めてじゃないなという気がしまして、何かなと思ったら、子供が生まれる時と同じ感覚だったのです。これ不思議なことなのですけど、子供がもうすぐ生まれ

るよと言われて、急いで走って向かった感覚と重なったのです。産まれるのはめでたいのですけどね。亡くなるのはめでたくないのですけど、何で同じなのだろうと思つたのか考えておりました。先ほど「生まれることも人生の一大事業。命を終えることも人生の一大事業。命を終えても私たちは終わりではない」というお話をさせていただきました。生まれることや生きることは大事なことですけど、命を終えることは今まで大事にしてこなかったのかな。隠すでしょ、死ぬことを。話しにくいじゃないですか。それって死ぬことは敬遠、隠しているのかな。でも私たちの人生の中で生まれて年を経て命を終える、同じなんですよね。私たちの生きているうちの仕事なのです。生まれるのも仕事、命を終えるのも仕事。そういう中で私たちの人生が成り立っているのかなと、そういうことを気づかせていただいたのが一つ。

おかゆみたいなのを食べて、水をちょこつと飲んでいて、亡くなる二、三日前に、不思議な感覚なんですけど、父の姿がすっきりしたのです。きれいな顔になったのです。これ不思議でしたね。苦しいはずなんですけど、いろんなものが多分おちたのでしようね。私たちが抱えているものを恐らく父はおろしたのでですね。これ凄い姿だなと思いました。ずっと座っている訳ですよ、すっきりした顔して。私たちが目指している姿はそこなのかなという気がいたしました。何もなければ、悩みもないわけです。よく悟りって言いますけどね、無の境地とか言いますけど、私たちの悩み、苦しみが無くなった姿がああなのかな。ぽつんと座っているのです。ベッドの上に。話しかけると何か言うのですけど。

私たちは目指すところ、よりよく生きたい、幸せに生きたい、いろいろな思いがございます。しかし、意識せずとも一番求めているのが、心安らかに過ごす事じゃないかな。ホッとできる。そういう時間を大切に感じますよね。そのホッとできるとき

は命を終える直前しかないので、かな、という風に感じたことでございます。しかしながら私たち浄土真宗、親鸞聖人の教えにご縁を頂戴した者でございます。様々な教えをいただく中でほんの一瞬でもホッとできる、阿弥陀様からの見る方向を変えよという言葉に一瞬でも応じることが出来れば少しはホッとできる、そんなときを過ごすことができると思う。そのようなことでございます。

それではそろそろ約束のお時間が来たようでございますのでこれで終わらせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

《編集後記》

◇本文は平成二十九年八月十三日、浄光寺「追弔会」の法話録であります。洵まことに勝手ながら紙片の都合上、割愛、編集させていただきます。

行事のご案内

「追弔会」
平成三十年八月十三日
午前十時
法話 細川公英(順教寺住職)